

会津の歴史シリーズ



第9回 会津の歴史⑧

(戊辰戦争のあと)

湯田 祥子 (ゆだ さちこ)

若松城天守閣郷土博物館
学芸員



◆戊辰のつめあと

1868年9月22日、1ヶ月に及ぶ籠城戦を経て会津藩は無条件降伏・開城となったが、これで幕切れではなく、会津藩の人々にとって、ここから新たな苦難の日々が始まったのである。

明治期以降、会津藩出身者で活躍した人物は大勢いる。東京帝国大学や京都帝国大学総長を歴任した山川健次郎や、陸軍の軍人として中国で起きた義和団の乱で各国公使たちを救いイギリスから勲章を授与され陸軍大将の地位までのぼった柴五郎、女性初の留学生としてアメリカで10年もの長い期間学び、帰国後は女子教育の充実に力を尽くした山川捨松（結婚後大山捨松）など、その経歴や功績を見ると目を見張ってしまうような、そんな人物がほんとうにたくさん輩出されているのである。しかし、その彼ら（彼女ら）も恵まれた環境に置かれていたわけではなかった。会津藩出身者は中央政界に居場所が与えられることは決してなく、かろうじて教育界や軍部などにその道が開かれていたのみだったのである。その限られた場で与えられた役割を最大限に果たしたのが、会津人である。

この差別（冷遇）は、驚くことに戊辰戦争が終

結した後何十年も続いていた。現代の私たちには少し信じられないことかもしれない。「お上に逆らった賊軍という謂われなき（と私たち会津人は信じ続けている）汚名を着せられ、その屈辱に何十年も耐え続けねばならなかったのである。

では、いったいなにを機に会津人の復権は果たされたのか。それはつまり、秩父宮^{やすひと}雍仁親王殿下と松平容保の孫である節子姫（のち勢津子）のご婚儀であろう。これは現代でもなかなか信じられないようなことだが、当時としても大きな驚きをもって世の中に受け止められた。昭和天皇の弟宮である親王に、何十年も前とはいえ“天皇に弓引いた朝敵”という不名誉な烙印を押された松平容保の血筋の女性が嫁ぐことなど、誰が想像できただろうか。そもそも、この御婚儀はどのような経緯があり実現したものなのだろう。

◆会津の復権

節子（以後敬称略）は、明治42年9月9日、松平恒雄・信子夫妻の長女としてロンドンにてお生まれになった。父恒雄は松平容保の四男で、外交官としてロンドン大使館に駐留していた。母信子は、肥前鍋島藩11代藩主鍋島直大侯爵^{なおひろ}の四女とし



昭和3年7月26日 会津日報夕刊（会津図書館蔵）

て何不自由なく育ち、やがて恒雄の下に嫁いできたのである。そんな両親のもとで健やかに成長した節子に思いもよらないご婚儀の話が持ち上がったのが、昭和2年のことだった。貞明皇太后殿下の意を受けた樺山愛輔伯爵の二度の訪問・説得を受け、はじめは「宮妃となられる方にはそれだけの器と格がなくてはならないが普通の娘として育った節子にはその地位を全うする力がない、その上祖父が朝敵の汚名を受けた身であるのに宮妃になるなどあってはならぬ」と断固として辞退していた両親も、最終的には本人の判断に委ねる事とし、そこで節子の心を動かしたのが生まれたころより乳母として大切に大切に育ててくれた女性の言葉だった。後年、妃殿下が御自ら出された回想録が世に出版されているが、その部分を少し抜き出してみよう。

…「私が宮家へ上がれば、お兄さまだって、正子や次郎だって、今までのように自由に伸び伸びと暮らすことはできなくなるのよ。お父さまやお母さまだって、お立場が難しくおなりになるし、いろいろ大変だと思うの」私は心にわだかまっているもう一つのことを口にしました。

私ばかりか親兄弟ともに宮妃の*連枝として勝手な行動はできず、世間的な失敗は絶対に許されなくなるのです。するとたかは、突然、ぼろぼろと大粒の涙を流しておりましたが、しばらくしてそれをぬぐうと、申しました、「皆さま、会津魂をお持ちでございます」…（中略）すると、私の心の中から、何とも知れぬ強い力がすっと立ち上がったのを感じ、やがてそれは「皇太后さまのご意志をお受けしよう」という決意になっておりました…（『銀のボンボンエール』主婦の友社）。

まだ10代の、少女とも呼べるような女性が、それまでの自らを取り巻く環境から一変し突然直宮^{じきみや}妃として皇室に嫁ぐことになる、そしてそれは「会津」という自らの血に流れる重く尊い歴史に後押しをされての決断だったということ、これらは現代の私たち一般人には想像もつかないような心の葛藤だったことだろう。ともあれ、御入輿が決まり、この時代はまだ皇族の婚姻は相手も皇族か華族に限られていたため、松平保男子爵家に入籍されている。

ご婚儀決定の翌年の昭和3年7月26日から、ご



秩父宮妃勢津子殿下 レリーフ

一家はご婚儀の前に祖先への報告のために会津を訪れた。4日間の滞在期間だったが、全会津の人々は歓喜をもってお迎えし、まさに狂喜乱舞の様相だった。現在もよく見かける光景だが、沿道の人々は手に手に日の丸の小旗をふり、その頃はまだ天守閣再建前で石垣のみだった鶴ヶ城址では大々歓迎会が開催され3万人もの人々が詰め掛けたとされる。そして、ご一家が会津滞在中に宿舎とされた東山温泉の旅館には喜びの意をお伝えしようと提灯を掲げた市民が参集し、また市内では提灯行列が夜通しねり歩いた。

そして、いよいよ9月28日にご婚儀が執り行われ、松平容保の孫姫が秩父宮雍仁親王の妃殿下とされた。この年は奇しくも戊辰戦争の慶応4年と同じ「戊辰」の年であった。戊辰戦争から実に60年目のことである。

◆歓喜、そして未来に

会津の人々にとってこのご婚儀は、暗く立ち込めた暗雲が取りはらわれた、そんな一大事だった。数年前にテレビドラマで一躍有名となった会津藩出身の新島八重も、この御成婚に寄せてこんな歌を残している。「いくとせか みねにかかれるむら雲の はれてうれしき ひかりをぞ見る」。実際に会津戦争を経験し、その後の苦しい時代を生き抜いてきた八重の、万感の想いが込められてい

る。これは、当時の会津人たちの皆の想いを代弁していると言って良いだろう。

会津のたどった戊辰戦争の悲劇と、その会津の復権が果たされた秩父宮親王の御婚儀についてここまでご紹介してきたが、会津が戊辰戦争で蒙った朝敵という汚名と傷が驚くほど長く人々を苦しめていたということ、そしてこれが払拭されるまでに少なくとも60年もの年月を要したということが、信じられるだろうか。しかし、これが事実なのである。先人たちの艱難^{かんなんしんく}辛苦の日々があつて、いまの「会津」があるのである。

さて、御成婚を祝う昭和3年の会津市民の行事が、現在も行なわれているのをご存じだろうか。市民が提灯を掲げてねり歩いた“提灯行列”である。これは現在は会津若松市の一番にぎやかな祭りである「会津まつり」の一つの催しとして、市内の小学生がそれぞれの町内会ごとに様々な提灯を持参して参加するイベントとなっている。

さらに、この会津まつりのメインである“会津藩公行列”、もともとは戊辰戦争での犠牲者の慰霊のために始められた行列なのである。昔は今と異なるルートで、滝沢本陣付近も通っていたことを知る人も多くはないだろう。

このように、始まりの形とは異なっている、連綿と受け継がれているものがあるのだということを実感させてくれるものが、会津の日常の中にある。

※連枝（れんし）：貴人のきょうだい



会津まつり 出陣式